

ヨハネによる福音書 11 章 1-44 節 「留まるところにある主の愛」

1A 霊的な愛 1-5

2A 永遠の愛 6-16

3A 真実な言葉 17-27

4A 死に対する怒り悲しみ 28-37

5A 一方的な働き 38-44

本文

私たちの修養会、第一セッションを始めます。私たちの今回の学びは、「愛」についてです。カルバリーチャペルでは、その特徴の一つとして「愛の至高性」というのがあります。愛こそがすべてのことにまさる道であるということです。カルバリーチャペル・コスタメサの週報には、長いこと次のような教会の説明がありました。イエス・キリストを主として信じている者たちの交わりとして、形成されています。「私たちが最も願っていることはキリストを知ることであり、聖霊の力によってキリストの似姿に変えられることです。(中略)クリスチャンの交わりにおいて真の土台となるのは、キリストのアガペの愛だけであると私たちは信じています。これは、私たちが有するどのような違いも超えて大事なものであり、キリストのアガペの愛なくして、自分をクリスチャンであると呼ぶ権利はありません。」

それで、この本、「愛 — さらにまさる道」があります。三部に分かれていますね。この順番が重要です。第一部が「私たちへの神の愛」です。第二部が「神を愛すること」です。それから第三部が、「私たちが神の愛をもって愛する」ということです。これはこの順番で、全てつながっていて、それで愛が教会に流れます。初めに神が愛であられて、その愛に満たされます。そして応答として、神を心尽くして愛します。全てを神に捧げて愛します。すると自分ではなく、神の愛が、自分を通して御霊によって流れる、ということです。こうやって、神の愛が自分に満たされるだけでなく、あふれ出るようになります。

セッション1では、第一部「私たちに対する神の愛」を見てみたいと思います。まず、一ページ目にある言葉だけ読んでみましょう。

もし、私たちがどんな理由であれ、いみじくも神に近づきたいと思うならば、神のご性質を理解することは非常に重要です。神があわれみ深い方であることを知らないなら、神にあわれみを乞うことは困難です。もし、神の優しさに気づかないなら、神に恵みを乞うことは困難です。神のご性質を知ると、喜びに満ちて期待しつつ、神の御前に来ることができ、岩のように揺るがされない信頼が与えられます。

ここに、神のご性質についての偉大な聖書の真実があります。神は愛です(第一ヨハネ 4 章 8 節と 16 節)。神の愛は決して絶えることはありません！神はあなたを愛して止みません。あなたが良いから愛するとか、悪いからあなたを嫌うというような愛ではないのです。神の愛は、いつも一定していて、変わることがありません。絶えることはありません。神はいつも、あなたの人生に愛を注いでくださいます。それは、あなたに対する神の愛は、あなたがどうであるかではなく、神がどのような方であるかによるからです。

至極単純なのです。「神は愛です。」それが原点です。

聖書の箇所から話していきたいと思います。ヨハネによる福音書 11 章 1-5 節までを読みます。

1A 霊的な愛 1-5

1 さて、ある人が病気にかかっていた。ベタニアのラザロである。ベタニアはマリアとその姉妹マルタの村であった。2 このマリアは、主に香油を塗り、自分の髪で主の足をぬぐったマリアで、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。3 姉妹たちは、イエスのところに使いを送って言った。「主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」4 これを聞いて、イエスは言われた。「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものであります。それによって神の子が栄光を受けることになります。」5 イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。

ベタニアにあるマルタとマリアの家での出来事です。ラザロという兄弟もいました。マリアとマルタと、イエス様のとの間には、個人的な関係がありましたね。マルタが、イエス様のためにもてなしをしようとしたけれども、思い煩ってしまって、御足で御言葉を聞いているマリアのことでイエス様をなじりました。そういった個人的な関係を持っていた仲です。それで、マルタとマリアは、ラザロが病んでいた、「主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」と言いました。イエス様は、「このことは神の栄光のためだ」と言われて、その後で、「イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。」と言われます。ここで 3 節で、姉妹たちが使った、愛していると言う言葉は、「フイレオ」です。友愛です。感情における愛です。彼女たちはイエス様がラザロの事を、感情の面で愛しておられることを知っていました。けれども、イエス様が 5 節で、「マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」と言われたのは、アガベというギリシア語が使われています。つまり、霊的な愛です。犠牲があり、また見返りを求めない無条件の愛です。

2A 永遠の愛 6-16

彼女たちは感情の面で、イエス様が愛しておられる所までは知っていました。けれども、イエス様はアガベの愛、霊の愛で愛しておられました。そこで次の行動を取られます。

6 しかし、イエスはラザロが病んでいると聞いてからも、そのときいた場所に二日とどまられた。

なんと、イエス様はラザロ、また二人の姉妹を愛しておられたから、二日とどまれたのです。そうしたら当然、ラザロは死にます。いえ、イエス様はそれを意図しておられました。ラザロが確実に死ぬことを意図しておられて、それでベタニアへと向かわれたのです。ここに、私たちが知るべき、神の愛があります。愛の本では、人は愛なしに生きることはできない、いろいろな愛があるということを述べていましたが、神の愛はそうした愛をはるかに超えたところにあるということが書いてありますね。ここがそうです、私たちの思いをはるかに超えたところにある、神の偉大な愛があります。けれども、それは同時に、感情的には時について行けない愛と言ったらよいでしょう。「敢えて、ラザロが死ぬのを待つ」ところにどんな愛があるのでしょうか！となります。けれども、そこで感情を超えたところにある、イエス様が約束されたところに基づく愛、神の栄光が現れるためだと言われたところにある愛があるのです。

7 それからイエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。8 弟子たちはイエスに言った。「先生。ついこの間ユダヤ人たちがあなたを石打ちにしようとしたのに、またそこにおいでになるのですか。」9 イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるではありませんか。だれでも昼間歩けば、つまづくことはありません。この世の光を見ているからです。10 しかし、夜歩けばつまづきます。その人のうちに光がないからです。」11 イエスはこのように話し、それから弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました。わたしは彼を起こしに行きます。」12 弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、助かるでしょう。」13 イエスは、ラザロの死のことを言われたのだが、彼らは睡眠の意味での眠りを言われたものと思ったのである。14 そこで、イエスは弟子たちに、今度ははっきりと言われた。「ラザロは死にました。15 あなたがたのため、あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます。さあ、彼のところへ行きましょう。」16 そこで、デドモと呼ばれるトマスが仲間の弟子たちに言った。「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。」

イエス様は、弟子たちにははっきりと、ラザロを死者の中からよみがえらせることによって、神の栄光を現すことを語られました。ご自身が十字架に付けられる時も近づいているので、まだ夜になる前に、つまりご自身が活動できる間に、このみわざを見せたいと願われました。ラザロと、マルタ、マリアに体験させたいと願われたのです。「愛」の本には、神の愛は尽きることがなく、とこしえまで変わらないことが書いてありました。永遠の愛をもってイエス様は彼らをお愛されていたのです。人が死んでも、それでも復活するのだということのあるところにある愛です。死んだ後にもある希望を持たせる愛です。

3A 真実な言葉 17-27

17 イエスがおいでになると、ラザロは墓の中に入れられて、すでに四日たっていた。18 ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほど離れたところにあった。19 マルタとマリアのところには、兄弟のことで慰めようと、大勢のユダヤ人が来ていた。20 マルタは、イエスが来られたと聞いて、

出迎えに行った。マリアは家で座っていた。21 マルタはイエスに言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。22 しかし、あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、私は今でも知っています。」23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」24 マルタはイエスに言った。「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」25 イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。26 また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」27 彼女はイエスに言った。「はい、主よ。私は、あなたが世に來られる神の子キリストであると信じております。」

イエス様が、マルタと話しておられます。マルタは、イエス様をなじっています。ここにいらしてくださったなら、兄弟は死ななかつたでしょうに、と言っています。感情においては、また理解においては、イエス様は愛していないと感じているところです。けれども、イエス様は「信じなさい」と言われます。わたしを信じる者は、死んでも生きるのだという事を信じなさいと言われます。永遠のいのちの約束をしておられます。マルタは、確かに終わりの日の教えとしては信じていましたが、今、ラザロの死という現実において、イエスさまの復活の力を信じていませんでした。

ここでも、「愛」の本では、「神の愛というのは、神の御言葉にある約束に基づいている」ことを何度となく話していました。数多くの箇所、聖書の約束が引用されていますね。それら一つ一つを、聖霊からの悟りによって受け入れ、神を信じるのです。その時に、聖霊が私たちの心に神の愛を注いでくださり、私たちは神の愛に満たされます。

4A 死に対する怒り悲しみ 28-37

28 マルタはこう言ってから、帰って行って姉妹のマリアを呼び、そっと伝えた。「先生がお見えになり、あなたを呼んでおられます。」29 マリアはそれを聞くと、すぐに立ち上がって、イエスのところに行った。30 イエスはまだ村に入らず、マルタが出迎えた場所におられた。31 マリアとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリアが急いで立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、ついて行った。32 マリアはイエスがおられるところに来た。そしてイエスを見ると、足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」33 イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、34 「彼をどこに置きましたか」と言われた。彼らはイエスに「主よ、来てご覧ください」と言った。35 イエスは涙を流された。36 ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。どんなにラザロを愛しておられたことか。」37 しかし、彼らのうちのある者たちは、「見えない人の目を開けたこの方も、ラザロが死なないようにすることはできなかったのか」と言った。

ここでイエス様は、泣いておられます。そしてその悲しみは憤りをもった悲しみです。イエス様は何をもって憤っておられるのでしょうか？強い悲しみを持っておられるのでしょうか？それは、人が死ななければならないという事に対する怒りです。聖書は「死」を「最後の敵」と呼んでいます(1コリント 15:26)。罪によって死が世界に入りました(ローマ 5:12)。元々は永遠に生きるために人間は造られており、死ぬことを神は定めておられなかったのです。それなのに、こうやって死という現実によって、人々が悲しまなければならないということについて憤りを持っていました。主は、これを滅ぼされます。そして、悲しみも取り除かれます。「黙示 21:4 神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」

先に感情の愛について、否定的に話しましたが、それは感情の愛がないことを意味しません。みこころにそった悲しみ、みこころにそった喜び、みこころにそった怒りがあります。みなさんが、神のみこころの中にいて、それで悲しみを通っているのであれば、それはイエス様の悲しみでもありません。イエス様は共に悲しみ、共に喜び、寄り添ってくださいます。

5A 一方的な働き 38-44

38 イエスは再び心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓は洞穴で、石が置かれてふさがれていた。39 イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだラザロの姉妹マルタは言った。「主よ、もう臭くなっています。四日になりますから。」40 イエスは彼女に言われた。「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」41 そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて言われた。「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します。42 あなたはいつでもわたしの願いを聞いてくださると、わたしは知っておりましたが、周りにいる人たちのために、こう申し上げました。あなたがわたしを遣わされたことを、彼らが信じるようになるために。」43 そう言うってから、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、出て来なさい。」44 すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたまま出て来た。彼の顔は布で包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

イエス様が、ラザロをよみがえらせました。ラザロは、この時に何かしたのでしょうか？していません、死んでいたのですから。イエス様が、「ラザロよ、出て来なさい。」と言われたので、生き返ったのであって、彼が出来ることは何もありませんでした。

ここに第一部の主題が詰まっています。神の愛というのは、神の主権によるもので、全く一方的なものであり、私たちが何かをしたから愛されるというものではなく、神はご自身が愛だから、だからそのようなことを行われているのです。死者の中からよみがえることについて、霊的にも神の愛による一方的な働きでありました。「2:1-5 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、

すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。私たちもみな、不従順の子らの中であって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛して下さったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」死んでしまっているのに、それでも神が愛して下さって、キリストと共に生かしてくださいます。

ですから、私たちは神の愛を初めに、受け入れる必要があります。神は愛しています。それを受け入れます。そして受け入れるためには、自分がここに書いてあるように、自分の罪の中で死んでいること、自分には自分で何もできない事、神の愛という力がなければ、自分を突き動かすものは何もないのだということを知らないといけません。「 I ヨハ 4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」そして、これを受け入れた愛によって、私たちの愛が神によって生まれてくるのです。